

平坦で生産力の高い氾濫原の農家は、余剰労働力を軽い兼業にとどめ、農業上は稲の単作に近い状態となっている。この劣性をカバーする意味を含めて、フィールドでは、土地利用に適したみかんを導入した。一時水田にまで進出したみかん栽培は、現在高度成長から安定成長に変わってはいるが、地域の基幹作物として水稲と並び称されるまでになった。又、都市近郊であるために、施設野菜・花卉等の園芸作物栽培と、畜産（乳牛・豚・鶏）がのびつつあって、大都市の近郊にみられるような近郊農村としての性格を、稲生産力の低さ故に小規模ながら獲得しようとしていると言えそうである。

以上、佐賀平野内での地域性に加えて、フィールド内の地域差についても考察してみたが、フィールド内の地域差は、自然的環境に加えて、都市的発達や行政区分の相違（佐賀市と佐賀郡に二分される）が反映しているように思われた。

## 桜島火山の地理学的考察

### —桜島町の農業を中心にして—

原 口 和 子

#### (1) 目的

桜島は、鹿児島湾北部、鹿児島市の対岸約3 Kmに位置する日本の代表的活火山である。始良カルデラの中央火口丘として形成され、有史以来30余回の噴火が記録されている。中でも最大といわれる文明年間（1471～1476）・安永8年（1779）・大正3年（1914）及び昭和21年の噴火で流

出した溶岩は、島の面積の43%を覆っている。桜島南岳は現在も活動を続けており、特に昭和47年10月以降は、その活動が活発化しているため、降灰による被害が相次いでいる。桜島における人文現象は、その火山活動によって大きく制約されていると思われる。そこで、活火山という動きつつある特殊な自然環境の中で、どのような人文現象が見られ、それがどのように変化しているかということをとらえ、自然と人文のかかわりを明らかにしたいと考えた。

#### (2) 方法

自然及び人文条件から、桜島の集落を北西部・南部・東部の3地域に区分した。さらに、桜島の代表的農業地域である桜島町（北西部）の農業について考察した。中でも昭和47年以降の降灰による被害に重点を置き、火山活動の農業に与える影響を明らかにしようと試みた。

#### (3) 結果

桜島では、常流河川がないため、水田は皆無で果樹栽培が農業の中心である。集落は、地下水の得られる海岸地帯に限られており、火山扇状地のある西半分では発達しているが、溶岩地帯である東部ではあまり発達していない。また、集落は次の3地区に区分できる。

1. 北西部……火山扇状地が発達し、みかんを中心にびわ、桜島大根などが栽培される果樹地帯である。
2. 南 部……降灰・鉄砲水などの被害を受けやすく、耕地も狭い。普通畑が多く、畜産が行なわれ、果樹ではびわが多い。
3. 東 部……溶岩地帯で降灰も最も多い。戦後の開拓村であり、農業も非常に零細である。

北西部は鹿児島郡桜島町に、南部及び東部は鹿児島市東桜島地区にほぼ一致している。

桜島町の農業は、柑橘類を中心とする果樹栽培が主体で、大正の噴火後温州みかんを中心とする商品生産が発展し、県内でも有数の富裕な果樹地帯となった。農業の特色から、東桜島的な赤水地域・果樹地帯の中で漁業が行なわれている西部地域・果樹生産の中心である中部地域・果樹中心であるが桜島大根の主産地である東部地域の4地域に区分される。昭和47年以降、火山活動の活発化に伴って降灰による被害が増え、現在農業は壊滅的な状態にある。樹種転換・ビニールハウス栽培・土壌改良・制度資金などの対策がとられているが、農家の生活は困窮しており、他産業への出稼ぎが急増して、専業農家は存在しなくなっている。

また、農業と並んで桜島の主要な産業である観光においても、火山活動の活発化のために観光客が減少する傾向が見られるほか、水産業では火山活動が原因だと見られる水銀汚染の問題があり、さらに、降灰の人体への影響も心配されている。

このように、桜島における人文現象は、桜島の火山活動によって大きく制約されている。また、土地利用及び集落にとっては、水も1つの制約因子になっていると言える。

## 滋賀県愛知郡の地理学的研究

増 田 泰 子

滋賀県愛知郡は、琵琶湖の東部、一般に湖東平野といわれる地域にある。ここは、琵琶湖岸でも扇状地の発達が良い地域で、愛知郡はこのうち愛知川によって形成された扇状地の右岸全域を含んでいる。

私が、ここをフィールドとしたのは、この明瞭な扇状地という地形のためであった。最初は、そのような地形条件が、この地域にどのような影響を与えているかを考えようと思っていた。しかし、最終的には、農村としての景観を保つ中で、農村内部に起きた変化とそうした変化の中で変わることなく続いてきたものの実態を把握することにより、近畿地方に位置する地域としての特色を出すことにした。

まず、農村内部の変化については、最近の15年間にみられた人口・産業の面での変化と自然とのかわりの面から、農業用水系統における変化をとらえることにした。また、農村内部で変わることなく続けられてきたものについては、この地方の祭祀とその背景にある村落内部の制度の面から考えてみた。

愛知郡の人口構造は、かつて典型的な農村型を示し、人口の減少期が続いたが、最近ではむしろ停滞の傾向にある。こうした中で、産業別就業人口の構成は、第一次産業と第二・三次産業の間で逆転し、農業の著しい兼業化をみた。このような就業構造の変化の背景には、愛知郡内外における第二・三次産業の就業先の増加という現象がみられなければならなかった。まず、郡外の雇用先については、愛知郡の隣接都市である彦根市と八日市市への通勤者数が圧倒的に多いことがわかった。一方、郡内では、愛知郡の唯一の鉄道の駅である愛知川駅周辺と愛知川の下流沿岸に多くの工場が分布し、特に第